

望月少年自然の家付近の植物（冬の木の子）観察会

池田 登志男

第140回例会は、平成4年1月18日～19日の両日、北佐久郡望月町協和、望月少年自然の家とその周辺で、冬の子の観察会として、信州大農学部馬場多先生を講師をお願いして行った。

参加者は講師の馬場多先生、白井幸長、中山 洸、今井建樹、花里弘、齊藤定美、小口好久、中沢 毅、友野増夫（19日参加）、それに佐久教育会植物委員の北村彰、龍堅守、そして幹事代行の池田登志男の12名でした。なお島島吉彦氏も参加の予定であったが、風邪で発熱のため欠席した。

厳冬の季節であり標高1300m近い自然の家に、果たして何人参加してくれるか気がかりであったが、夏の例会以上に多くの方々御参加を頂き、雪の積もった雑木林を歩き、馬場先生の説明をみんな熱心に聞き、いつも見慣れた木でありながら、その冬芽を見るのは初めてというのも多く、枝を採集したり、芽をルーペでのぞきこんだりして、寒さも忘れて、楽しい1日を過ごすことができた。

第1日目は1月18日（土）、夕方5時ごろ少年自然の家に集まり、夕食後、7時30分～8時まで、少年自然の家主催事業「自然に親しむ親子のつどい」に集まった親子約140名といっしょに、講師の馬場多先生から「冬の子」の話聞く。同じ木の夏の姿や花の咲いている様子と冬の子のスライドを順に見せて頂きながら説明を聞く。幼稚園児から大人までの集まりであったが、スライドを見ながらの話で、わかりやすく楽しい学習ができた。

その後、8時ごろからはリーダー室で懇親会をしながら、県下各地の植物分布、分類、生態などさまざまな植物談話が深夜まで続き、床に就いたのは午前1時ごろの人が多かった。

第2日目の19日は、朝8時30分～9時30分まで1時間、馬場先生から「南アルプス鋸山の熊穴沢における砂礫の安定とカラマツ植生の関係」の話聞く。

熊穴沢の森林形成には、砂礫の移動と安定が関係しながら、カラマツ林から遷移する一連の循環がある。この循環が継続する限り、天然カラマツ林も存続する可能性があり、熊穴沢の森林全体が平衡状態を保っているのだという。

9時半から午前中は少年自然の家周辺の雑木林の冬の子を観察する。

その主なものは、ミヤマウグイスカグラ、ノリウ

ツギ、サラサドウダン、ドウダンツツジ（栽）、ミズナラ、ニワトコ、ミヤマザクラ、ヤエガワカンバ、ウワミズザクラ、クリ、サワフタギ、クマヤナギ、バッコヤナギ、クロウメモドキ、ヤマブドウ、ツタウルシ、サルナシ、チョウセンゴミシ、ヤブデマリ、イボタヒョウタンボク、アズキナシ、オニウコギ、バイカウツギ、アサノハカエデ、ダンコウバイ、ミヤマガマズミ、キハダ、ユモトマユミ、ヤマナラシなどである。

ニワトコの冬芽は大小2つずつ対生していて大きい方が花芽、小さいのが葉芽であること、ミヤマガマズミは外側の芽鱗にあら毛があり、光沢はないという。ウワミズザクラの2年枝には花序の落ちたあとが大きくついていて節くれだった独特のスタイル、クマヤナギは1～2mmの小さな芽が、その先を茎の方へ向けてついていた。サルナシの冬芽は突き出た葉痕部の中にあり、髄は黄褐色で隔壁があるので斜めに切ると階段状になるが、マタタビの髄は白くて太く、つまっていることで区別できること、また、ダンコウバイの花芽は無柄に近いが、アブラチャンの花芽は柄がはっきり見えることなど、冬芽、葉痕、木肌などで、こんなに種の分類が出来ることに驚くばかりであった。

11時半ごろ自然の家に戻って昼食をとり午後は1時ごろから、少し溪谷を下って標高1000m～900mあたりの雑木林でヤマグワ、ウリカエデ、ヤマウコギ、ハンノキ、コクサギ、ニガキ、ハナイカダ、ミツバウツギ、イヌザクラ、ツノハシバミなどを見る。

ヤマグワは芽鱗が5枚あった。栽培のクワは2～4枚ぐらいだそう。ウリカエデは葉がないのでウリハダカエデとの区別に迷ったが、ウリハダカエデの冬芽の方がずっと大きいので芽だけで区別は容易であるという。

佐久は元来積雪の少ない地域であるが標高1200mあたりになると40～50cmの積雪で、冬の山にあまり入らない私は認識を新たに。白い雪の上に羽をつけた小さな木の実が落ちていたり、小鳥や獣の足跡を見たり厳冬の例会も得るものは多かった。冬の子の観察会を今後も是非やりたいという声を嬉しく思いながら、遠路おいで下さった馬場先生に感謝して、午後3時前に解散、それぞれ帰途につく。